



日 口 交 流

発行 : 特定非営利活動法人 日口交流協会
 E-mail:nichiro@nichiro.org
 Home Page http://www.nichiro.org
 〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14 麻布台マンション401号
 Tel : 03 (5563) 0626 Fax : 03 (5563) 0752



第19回日本文化交流団 (サハリン)

千葉 麻里

2019年5月30日(木)から6月3日(木)まで、ユジノサハリンスク、ドーリンスク、ホルムスク市にて「ロシアにおける日本年2018」の最後を飾る「日露文化芸術フェスティバル」2019に参加した。実は、2013年と2014年に訪れた際の反響が大きく、再訪を望む声が再三あったという。ユジノサハリンスク日本国総領事館から連絡があり、私たちはきもの、風呂敷、友禅の講習会をするために3名で参加することとなった。このフェスティバルには他に空手、踊り、太鼓や津軽三味線、アニメ音楽のグループ、ピアノ、ヴァイオリン、ドラムとハーモニカのカルテットなどの団体も参加していた。



なポスターも飾られていた。会場はまたすぐにいっぱいになり、机が狭くなった中で予備の教材もすべて使われて行われた。風呂敷講習後の友禅には絵の先生も参加しており、新しい友禅のスタイルを見せられたようで、私達も勉強になった。最後に自分のサインを入れるためにみんなにそれぞれカタカナで紙に名前を書いてあげると、器用に真似て写していた。また、講習の合間には、美味しい紅茶と手作りの軽食を頂いた。

私達は羽田から新千歳経由でサハリン入りをし夜にはホテルで州政府主催の歓迎レセプションを受けた。ロシア料理にバラライカ演奏や民族衣装の豪華なもてなしだった。

みなにそれぞれカタカナで紙に名前を書いてあげると、器用に真似て写していた。また、講習の合間には、美味しい紅茶と手作りの軽食を頂いた。

夜は総領事公邸で全員で打ち上げ夕食会。皆、それぞれ成果を上げてほっと一息、お互いに乾杯したり写真を撮ったりと賑やかな会になった。お世話になった有馬副領事、松本副領事とそして平野総領事と今後の交流活動継続を約束した。

翌31日は、午前中市内観光後、州立民族芸術センターで開会式の入り口に立つ娘さんたちにきものを着付ける。美術館も以前訪れたときのままで、町並みは懐かしく感じられた。

今回は、有馬副領事は出発前に多くの団体との日程の調整、会場の写真や町の地図などの情報を送って下さった。また現地では終日付き添って、時にはこちらの我儘を聞いていただいた。ホルムスクとドーリンスクでは、私達一人ひとりに感謝状が用意されており、あちこちでカメラクルーの姿を見、インタビューも何度か受けた。町のいたるところにチラシが置かれ、ポスターも目に付いた。総領事館の通知が行き届いており、地元との関係が良好で密接であることがよく分かる。

6月1日、州立図書館で風呂敷講習会。ここからの熱烈なリクエストがあったそうで、会場は飾りつけがしてあり(ボールの代わりに風船を拝借)、椅子が足りないくらいに熱気があって進行もスムーズだった。図書館からドーリンスク市へ車で移動してきもの、友禅のマスタークラス。こちらも時間前に待っている人たちがいて人数は予定より多かった。きものデモンストレーションでは終了後も親子で質問に来て、きものに触れたり強い関心を持っていることが窺えた。友禅にも親子連れがいたが、父親が娘の描くのを温かく見守って伸び伸びと描かせていたのが感動的だった。男の子が一人、友禅の特徴にすぐに気づいて見事なボカシを駆使していたのに驚いた。

ロシアの会社が手配した北海道から駆けつけてくれた私達の通訳、リンマさんはとても優秀で心配りが素晴らしかった。担当のエレーナさんも美術関係の仕事をしているだけあった。それぞれ担当者や同行者が相応しい人材が当てられたと思われる。また、他団体との交流ができたことも大きな収穫だ。総領事館の皆様、貴重な機会をいただき、通訳、担当の皆さん、熱心な現地の方々にも心から感謝いたします。(常任理事)

2日の朝、ホルムスクへ移動。市民会館には様々な民族衣装の人形や墨絵の展示があり、私達のフェスティバルの大き

*以下のURLをご参照ください。
 ユジノサハリンスク市: <https://sakhalin.info/news/171695>
 ドーリンスク市: <https://sakhalin.info/news/171627>
https://yadi.sk/i/3CrUET_uQ_DNtQ

お知らせ

●第63回マトリョーシカ絵付け教室

日時: 2019年8月25日(日) 13:00~16:00

講師: 菅野エレナ

場所: 田町駅みなとパーク芝浦、「リーブラ」造形表現室

会費: 3,000円(5個セットの教材、講師代、お茶代含む)

●講演会『日本とロシアの宇宙開発』

ロシアと日本の宇宙開発・技術の歴史や状況、協力関係をJAXA職員の方にお話いただきます。

日時: 9月7日(土) 14:00~16:00(開場13:30)

会場: 日本記者クラブ(日本プレスセンタービル9階)

会費: 会員/友好団体会員/一般学生1500円、一般2000円、
 会員学生/留学生1000円

申込: 会費区分・氏名・連絡先明記の上、協会まで。

懇話会スタッフ募集: gene.masuda@s8.dion.ne.jp 益田まで。

●板橋花火大会を楽しむ日口交流の集い

日時: 2019年8月3日(土) 18:00~

会費: 参加は会員のみ 500円(飲み物代)

●第11回懇親ロシア語合宿

日時: 2019年9月22日(日)~23日(祝)

場所: 壬生町嘉陽が丘ふれあい広場

(栃木県下都賀郡壬生町上稲場1056-8)

集合場所: 東武宇都宮線壬生駅

費用: 会員16,000円、一般19,000円

*オリンピックを見据えてスポーツをテーマに、実際に動きも取り入れて勉強します。

*お問い合わせ、お申し込みは協会事務局まで

Tel: 03-5563-0626 Fax: 03-5563-0752

E-Mail: nichiro@nichiro.org

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております



大相撲観戦記 (5月場所)

中村 泰弘

令和に改元後初めての場所となる大相撲5月場所の7日目に、ロシア大使館の方々と相撲観戦に行っていました。交流協会からは3名が参加し、27名のロシア人に付き添って日本の国技を楽しみました。

千秋楽には訪日中のトランプ米国大統領の出席で話題になりましたが、この日は有名人の来場もなく、中盤戦での星の積み重ねをねらう力士たちによって淡々と取組が行われていました。

私たちの席は東正面2階の最後列のすぐ前の並びに固まっています。席からは東の力士の背中と後ろ頭、その上にこちら側を向いた西の力士の顔が見える角度で土俵を見下ろしていました。周りの席はいつもながら外国人見物客でいっぱい、いかにも物見遊山的な雰囲気をかもし出していました。満員御礼の垂れ幕がかかっているにもかかわらず空席はありましたが、隣で観戦していた坂本さんがおっしゃるには、入場者数が一定率を越えると垂れ幕を出してよいのだそうです。

土俵が小さく見えたのは席からの距離もありますが、おそらく上にぶらさがった吊り屋根の大きさに圧倒されているせいもあるでしょう。館内のざわめきや熱気をつつみこむ高い天井の下で、吊り屋根は土俵上の力士や行司たちを護っているかのようでした。

力士の中でひととき目立っていたのがグルジア出身の栃ノ心でした。細い脚に大きな背中と毛むくじゃらの胸は日本人の体格とまるで違っており、巨体にもかかわらず敏捷な動作

には目をみはるものがあります。栃ノ心が呼び出しを受けて土俵に上がると、観客席のどこからか朗々たるテノールで栃ノ心を応援する声が聞こえてきてその吟詠に館内は少しどよめきました。いよいよ制限時間いっぱいになると、栃ノ心は気合を入れるため狭い土俵をすり足で歩き回り大きな顔をパンパンとたたき、その動物的なしぐさがユーモラスで会場はどっと盛り上がりました。この日まで全勝で勢いに乗っていたせいもありました。相手の琴奨菊も粘りましたが、最後は寄り切って栃ノ心に軍配が上がりました。

結びの一番が始まると、ひとりのロシア人の女の子がよく見える前の方の空席に移動しました。この光景をみて、昔ロシアの劇場やエアロフロートの機内ではよく見かけた「指定席でも空いていれば自由に座ってよい」というロシアの文化を思い出しました。いつだったか日本でもこういったシステムを見習って導入するといいいのではという意見を新聞の投書欄か何かで読んだことがあります。現状をみると浸透することはなかったようです。しかし将来は人びとの意識が変わり空いているのであればどうぞみたいな社会にもしかするようになるのではないかとも思えるのでした。

すべての取組が終わり、坂本さんと山岸さんと一緒にロシア人の方々に礼とお見送りの挨拶をしました。ロシア語や片言の日本語で返してくれる大使館の方々にまじって先ほどの女の子が上手な日本語で「よかったです、また来たいです」と言っているのが印象的でした。(常任理事)

第40回戸田港祭り報告

内堀 学

7月20日(土)戸田で開催された戸田造船郷土資料博物館開館50周年記念式典、及び戸田港祭りに当協会より朝妻副会長、内堀専務理事が参加し(江守副会長も一部参加)、水口戸田日露交流協会理事長(当協会常任理事)に資料博物館開館50周年記念式典、ブチャーチン行列、宝泉寺ロシア水兵慰霊祭、塩衣式など現地での受け入れのアレンジをして頂いた。

戸田造船郷土資料博物館は1854年ディアナ号遭難時ロシアブチャーチン提督一行が滞在し、日露共同で日本初の近代的洋式帆船「ヘダ号」が建造され日口交流の原点となった戸田に日口友好のシンボルとして1969年に開館されたもので、開館時当時の旧ソ連大使館より500万円の寄付が寄せられた経緯がある。本年開館50周年を記念し沼津市主催で記念式典が催されたもので、日露の来賓他約50名が列席した。ロシアからはロシア大使館ビリチェフスキー公使夫妻、アダモウイチ二等書記官、ロシア通商代表部パブレニコ副主席代表、パシェンコ経済部員、及び前日19日静岡県主催で開催されたロシアノブゴロド州経済交流セミナーに参加したミニナ第1副知事を代表とするノブゴロド州経済ミッション9名が参加し、ビリチェフスキー公使がロシア側を代表して式辞を述べられた。ミニナ第1副知事よりブチャーチン提督の出身地がノブゴロド州であったこと等紹介があり、沼津市とノブゴロド州で記念品の交換が行われた。

引き続き午後より第40回となる恒例の戸田港祭りが開催され多くの日露の人々が参加し、ブチャーチン行列、宝泉寺

ロシア水兵慰霊祭、塩衣式、船上餅投げの儀式が行われた。宝泉寺慰霊祭ではロシア大使館ビリチェフスキー公使が、塩衣式ではロシア通商代表部パブレニコ副主席代表がロシア側を代表して来賓として式辞を述べられた。

なお今回、ロシア大使館、通商代表部側の日程上の都合で夕刻予定の日露交流懇親会は実施されなかった。(専務理事)



会員の皆様へ

来年3月の通常総会にて役員の改選が予定されており、本年9月に発足予定の次期役員候補推薦協議会にて総会で選任される役員推薦候補の協議が行なわれます。従来理事の皆様から推薦頂き新任候補の協議を行ってまいりましたが、本年はこれと並行して会員の皆様より役員推薦候補者の公募を実施することとなりました。ロシアとの民間の友好交流に興味があり、当協会のボランティアの日口交流活動に積極的に企画参画する意思のある候補希望者を募集するものと年齢国籍は問いません。詳細は事務局までお問い合わせください。なお、応募者の推薦の是非は事務局による事前審査をへて上記協議会で決定されますので、公募が推薦を約するものではないことを予めご理解お願い致します。(事務局)

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております

《モスクワ・アラカルト54》

デニスの花園

日向寺 康雄

今年は海の日が過ぎても梅雨が明けず、うっとりしくじめじめした日が続き、カッと照りつける夏の太陽がなかなか顔を見せてくれない。一方モスクワからは「もう夏の盛りは過ぎた」とのメールが届き始めた。そして2年ぶりにデニスが「うちの庭にまた、いっぱい花が咲いたよ」という書



き込みと共に、彼の大切な「夏の庭園」の写真を送ってくれた。

彼とは10年ほど前、星占いの本などを専門に出しているモスクワの出版社を取材した際、知り合った。花が大好きな若者で、私の母が生け花の先生だったことに大いに興味を持ったようだった。彼の故郷は、ロシア西部スモレンスク州北端のバスでしか行けない所で、町はずれの国境の向こうはベラルーシ…シャガールが生まれたヴィテプスクに近い。夏至の頃になると、画家が愛した眼も覚めるように青く鮮やかなワスイリョク(矢車菊)の花が、あたりの野原一面に咲き乱れる。デニスは小学校の頃から一風変わった少年で、ほとんど誰ともしゃべらず、いつも一人きりで過ごしていたという。嫌われたり、いじめられたりしていたわけではなく、先生も生徒達も「あの子はそういう子だから」と受け入れ、不必要な干渉はしなかった。学校が終わると彼は急いで家に帰り、暖かい頃は母が自宅の庭で丹精込めて育てていた花々の世話を一所懸命手伝い、寒くなると自分の部屋でボール紙を器用に切り抜いて精巧な街のミニチュアを作ったりした。そして15を過ぎる頃から、自宅

の庭の手入れはほぼすべて、彼の仕事になった。

デニスは時々、私のお茶に付き合ってくれたが、好きなチョコレートケーキを注文した後は、もうほとんど何もしゃべらない。しかしその後、公園などを散歩する時には人が変わったように多弁となり、花壇の草花や並木道に植えられている木々について驚くほど詳しく、いかにも嬉しそうに、そして情熱をもって説明してくれた。そんな時、彼は少し照れながら「いつかうちの庭を世界で一番美しい庭にするんだ」と夢を語った。

ソ連邦崩壊後、野蛮な資本主義の濁流に飲みこまれ、拝金主義が広がり、金カネかね…が何より優先するようになってしまったモスクワ生活の中で、彼と過ごす時間は実に静謐で、私自身癒されたものだ。あの頃、私の心の奥の「花園」も荒廃し、すっかり忘れられた存在になっていたからだ。それがあつた時、彼からぶつくり連絡が来なくなった。メールを出しても電話しても返事がない。ひどく心配した。その後大分たつて、やっと彼から「ママが死んだので田舎に帰った。庭はすっかり雑草だらけ。当分君をお客に呼べない」とのメールが届いた。それからまた月日が流れ、諸般の事情で日本に戻った私のもとへ、先日久しぶりに送られてきたデニスの花園の写真は美しく、彼自身の再生を物語っていた。人文大学の通信教育科に入り、卒業したら旅行会社で働くのだそうだ。「いつか日本に行くからね」そうデニスは書いた。私はホッと目頭が熱くなった。

(元モスクワ放送チーフアナ・現大学非常勤講師)



日本に最も近いロシアの世界遺産

ービギン川溪谷

畔上 明

日本では明治維新を迎える前夜の150年程前、清が弱体化している時に、アムール川の南と北で、そしてその支流であるウスリー川の西と東で中国とロシアの国境線が引かれました。国境近くにロシア極東の拠点としてハバロフスクとウラジヴォストークが建設されたのもその時期に合わせてでした。

アムール川とウスリー川が合流するハバロフスクの町からバイカル・アムール道路を南下すること250キロ、舗装が途切れる手前に架かる大橋、自然の恵みを受け東のシホテ・アリニ山脈より西のウスリー川に向けての240kmを滔々と流れゆくビギン川を渡る貴重な橋が世界自然遺産に足を踏み入れる入口です。

2015年9月私たちがビギン川に辿り着くや、クマの親子が中州より川を横切る姿を目撃し、いよいよロシアの大自然の只中に入り込む実感を持ったものでした。

南北に流れるウスリー川と日本海とに挟まれた沿海地方、そこは知られざる自然界の宝庫が広がっています。シホテ・アリニ山脈一帯、そしてその山脈を源流とするビギン川周辺は、針葉樹林タイガと氷河期以前の姿を残す広葉樹林の混合林、その森を支配するアムールトラを始めとする貴重な生物が棲息し、自然の摂理に従ったかたちでツングース系のウデゲ人、ナナイ人が狩猟や漁業を営んでいます。

ウデゲ人が舟を操って私たちを迎え、2人ずつ舟に乗ると、ロシアのアマゾンとも言われる迷路の如く枝分れし網目状を成すビギン川の、その蛇行した流れを南西に2時間かけて30キロばかりを下っていくのでした。雪解け水が薙倒した大木、剥き出しの泥炭層、川岸に立並ぶ白樺の木々、或いはカラマツの林、空を見上げれば地球上の空を独占したかと思える果てしない広がり、人がちっぽけな存在に感じられる恍惚状態となって到着したのがウデゲ人集落クラスヌィ・ヤールです。ウデゲの女性が振舞うノロジカのボルシチ、マントイ、蜂蜜茶を味わい、シャーマンの血を継ぐ長老の女性、学校では魚の皮の工芸をする子供たち、ウデゲの踊り、マユミの弓…といった思い出を残してさらに村から舟で川を下ること1時間、目的地バハラザのキャンプ地とやってきました。

まさに「デルス・ウザラー」の世界に入り込んだ様に、生物学者イリヤさんの案内で森の中を歩き回る日々は忘れ難いものでした。チョウセン五葉松、トウヒ、モンゴリナラ、ヤチダモ、チョウセンゴミシ、マンシュウグルミ、猪のクシャミをするような合図が折々響き、飛翔するリスの素早さ、クマの足跡と木の穴の奥にはミツバチの巣、トラが樹木に印を付けた痕、タヌキ、アカシカの足跡、手当たり次第動植物のロシア名と和名を書き込んだ手製辞書が欠かせません。

山小屋の主人ニコライさんのレノーク(コクチマス)のスープ、ハリウス(カワヒメマス)の唐揚げや燻製のご馳走、イチゴ味のウォッカ、夜を迎えるバヤンの音色、川辺の蒸風呂に入った後は裸のまま川に飛込む快感を余韻に寝付くのでした。(「プロコ・エアサービス」シニア・アドバイザー)

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております

ロシア連邦共和国紀行 (その1)

服部 文男

ロシア連邦には22の共和国があるが、これまでロシアの旅には共和国という概念を持たずに旅してきた。振り返るとフィンランドに隣接するカレリア共和国、モンゴルに隣接するトゥヴァ共和国、ハカス共和国を訪問していた。この度、モスクワから東方約1000KM離れた地域(沿ヴォルガ連邦管区)にある6共和国を旅した。

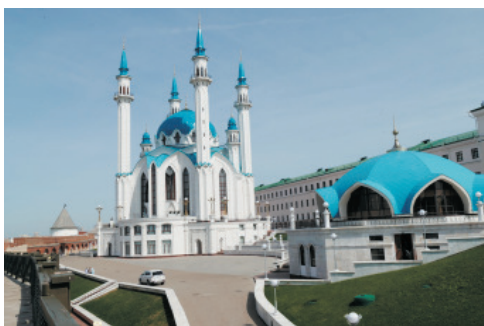
成田からアエロフロート・ロシア航空SU261便(BOEING777-300ER)でモスクワ・シェレメチョヴォ空港に行き、SU1194便(エアバスA320)に乗り継ぎ1時間45分の飛行でタタールスタン共和国のカザン国際空港に着陸。乗り継ぎ待ち時間を含め15時間は疲れるが、成田からの機内で隣席のスペインの若者、前席のイスラエル人、テニスの大坂なおみ選手に似た流暢な英語を話す日本人と機内友となり、苦手なロングフライトを少しは楽しい時で過ごすことができた。(ルート下図)



『タタールスタン共和国』

カザン国際空港から都心までの距離は26 km、この地域の空のゲートウェイとなっている。タタールスタンの面積は68,000 km²で北海道の約80%、人口約378万人、内50%強がタタール人である。首都はカザンで、モスクワなどと結ぶ鉄道と市内地下鉄がある。午後10時頃カザンの街に入ると「ЯКИТОРИЯ」のネオンが目に入った。日本の「やきとり屋」の名称で、モスクワでは数軒見かけていたが、カザンでも見かけ驚いた。

観光のスタートは世界遺産のカザン・クレムリン。1562年イヴァン4世に建てられたスパスカヤ塔から入場し、クルシャリフモスク(2005年建立、元々のモスクはイヴァン4



世に攻められた時破壊された。左写真)、タタールスタン共和国大統領官邸、生神女福音聖堂(ブラゴヴェシエンスキー

聖堂、ピョートル1世、エカテリーナ2世、プーシキンなども訪れている)、モンゴル時代の統治者ハンの霊廟を見学。これらの建造物が立ち並ぶ丘の眼下には広大で美しいヴォルガ川が光っている。

昼食のペリメニ(餃子スープ)を食べた後、マリ・エル共和国を目指す(約180 km/約3時間)。途中イワン雷帝がカザン攻略の際、基地としたスヴィヤシユスク島に立ち寄った。この砦、周囲が川のため、建造に必要な木材が簡単に搬

入できたため、4週間で建設されたとのこと。島内にはロシア正教、イスラム教の寺院が多数建ち並んでいる。聖母被昇天大聖堂と修道院(1555年建立、16~18世紀の宗教学・布教の中心地)は、世界遺産となっている。女性がイスラムの寺院を入るときは、頭に布で覆いをする他、ズボンを穿いても腰布を巻くことが必要である。どの寺院も入口に腰布は置いてあり、老婦人がCHECKしている。

『マリ・エル共和国』

マリ・エルの面積は23,200 km²、四国の約1.3倍の広さで、人口約69万人と少ないが古くからマリ人の住む地域であり、首都はヨシュガル・オラである。街の建物などはヨーロッパ調の色彩を意識するなどが感じられたが、マリ人の文化との融合には課題もあるようだ。ヨシュガル・オラでは生神女福音聖堂(ブラゴヴェシエンスキー聖堂)と共和国広場を見学した後、ノゴトコフ・オブレンスキー広場に向かった。広場はヴェネツィアのサンマルコ広場を模して作られたとのこと。広場に面した建物に仕掛け時計が11時を合図に動き出した。

この広場前の道路向かい側には、マリ・エル共和国政府庁舎、隣は市庁舎が並んでいる。広場の裏側にバザール(屋外市場、写真下)の一角があり、色とりどりの野菜や花、野菜の苗が目立っていた。これからダーチャ(畑付き別宅)で野菜作りが盛んになる季節を感じた。この後、マリ・エル国立博物館に向かいマリ人の伝統文化や自然宗教、動物などの展示を見学した。

ピロシキの昼食後、チュヴァシ共和国を(約100 km/約2時間)目指し夕方には到着した。(副会長)



海老名市役所でロシアのセミナー開催

『現代ロシアと日露関係』

神奈川県海老名市役所が主催する「多文化共生セミナー」においてロシアについてのセミナーが7月23日10時~12時で開催されました。

講師は、在日ロシア連邦大使館イゴール・アダモヴィチ書記官で演題は『現代ロシアと日露関係』。参加者は60名でこの内、小・中学生が20名以上でした。内容はロシアの歴史、民族、観光、食べ物など幅広いものでした。

海老名市は9月20日から開催されるラグビーワールドカップ・2019日本大会ロシア代表チームの公認キャンプ地となっていることからロシアのセミナーを企画し、講師について当協会に依頼のあったものです。

セミナー当日、アダモヴィチ氏と私が海老名市の内野市長からご挨拶を受け今回のお礼と今後の企画においても協力をお願いがありました。今後共、日口交流の発展に係る事案については協力していきたいと思っております。(服部文男副会長)